随想

人工知能と仕事

愛知淑徳大学
人間情報学部 教授
牧 勝弘

ここ数年の人工知能（AI）技術の発展は目覚ましく、スマートフォンに目を向ければ写真に撮ったモノを自動で調べてくれるアプリやなんでも質問に答えてくれるアプリが人気です。それ以外にも自動車の自動運転やコンビニエンスストアの商品管理など人工知能が活用されている事例を挙げればきりがないほど我々の身の周りに溢れています。一昔前、芸術分野は人の創造性や感性が要となるため人工知能では代替できないと言われていましたが、小説やマンガ、音楽、写真、映像などの芸術分野は、これまでに人類が残した作品点数が多いため、むしろ人工知能を活用し易いという皮肉な状況になりつつあります。それでは、人工知能技術を利用して研究を行っている最先端の現場ではどうでしょうか。材料の研究開発を行っている知り合いの研究者から聞いた話では、原料の調合とその検証という研究者にとって一番面白いと感じる部分を人工知能が担い、機械への液剤の補充など本来研究者がやりたくない仕事を研究者自らが担当しているとのことでした。その知り合いの研究者は、人のやりたくない汚い仕事や危ない仕事を人工知能や機械が率先してやってくれると思い描いていたのに、現実は完全に逆だと嘆いていました。インターネットやSNSでは将来人工知能に奪われてしまう仕事や職業が紹介されていますが、奪われるだけでは済みそうにありません。若い世代の人たちには、人と人工知能が共生できる社会を創っていって欲しいと想っています。